



杉村靖彦 Sugimura Yasuhiko, 田口 茂 Taguchi Shigeru, 竹花洋佑
Takehana Yōsuke, eds., 『渦動する象徴：田辺哲学のダイナミズム』
[*A Vortex of Symbols: The Dynamism of Tanabe's Philosophy*]

Kyoto: Kōyō Shobō, 2021, 388 pages. ¥12,210.

ISBN: 978-4771034228

待望の一冊と言ってよいのではないか。いま田辺を研究している人にとってはもちろん、これから田辺を読み、あるいは“使って”みたい人にとっても有益な書物である。

私見では、田辺哲学は大きく分けて、社会的カテゴリー（社会、国家、個人、民族、法、連帯、宗教等）の「論理」と人間の「生（死）」との関係を分節化する社会存在論と、主に先行学説の吟味を通じた理性批判ないし反省的認識論（数理哲学、科学哲学を含む）の二つの基軸をもつ。だがそれらは体系部門を成すわけでも道具関係にあるわけでもなく、むしろ互いのうちに入り込んで互いを不安定化しながら、絶えず過剰と欠如を産出する思考の運動（「渦動」）をなしている。どこにも落ち着けないこの動性が田辺の複雑さであり、魅力でもあるが、本書は複雑さを捨象することなく様々な切り口から魅力を展示している。

本書の内容は以下の通り。①田辺の哲学および人物へのイントロダクションとなる、研究者による二回の座談会（参加者一部入れ替え）。②テーマごと5部構成計12本の論文。③初公刊となる二つの資料。(a) 敗戦迫る1945年5月に西田幾多郎に宛てた政治的内容の書簡。(b) 京大講義（1944年12月）の速記録を元にした小冊子『私観 教行信証の哲学』。④この10年余りの間に出了研究文献の包括的なリストを含む「田辺元文献目録 二〇〇九年～二〇二〇年」。

①の座談会は田辺の人と思想について、話題ごとに関連する歴史的な文脈を接続しながら討議しており、彼の思想の主なトピックと大まかな背景を頭に入れることができる。どの参加者も各々の仕方田辺に対して慎重な距離を保っており、それは事柄ごとに一定の根拠に基づく批判的距離でもあるが、同時に、袋小路とそこからの転換・

反転そのものをエンジンとする田辺の思考がストレートな同定や肩入れを許さないせいであることも伝わる。この点、複数の視点からツツコミを入れあう座談会形式が功を奏していると思う。

さて②の論文集が本書の主要部であるが、紙幅の都合で詳しい論評は無理なので、全体の構成を示した後、いくつかの論考のさわりを紹介しつつ、主に論考間の連関を書き留めておきたい。

構成は5つのテーマ、I「種の論理」の意味とその行方」、II〈懺悔道〉としての宗教哲学」、III「死と象徴をめぐる最晩年の思想」、IV「『京都学派』の中の田辺哲学」、V「田辺哲学の今日的可能性」から成り、或る哲学者の全体像をつかむための基本的なテーマ—時期ごとの思想、歴史的布置、アクチュアリティーが押さえられている。

各論文が補い合うような角度から題材を扱っていることは美德である。例えば田辺の代名詞である社会存在論「種の論理」に関しては、藤田正勝氏が当時の日本の状況や田辺の経験を踏まえ、時代に対峙する一知識人の社会思想・共同体論としての姿を描き出している一方、村井則夫氏は種の論理とそれを深化した後期の象徴論を、カント図式論解釈（超越論的構想力論）に基づくハイデガーの存在論の限界を見極め、超越論哲学の伝統に連なりつつそれを超克する試み、つまり当時の（そして未だ汲み尽くされざる）西洋哲学の最前線として呈示している。あるいは敗戦迫るなか親鸞の再読から生まれ、哲学（者）の徹底的自己批判—「自己」批判の自己性・固有性にまで達する一を内蔵する「懺悔道としての哲学」に関しては、そもそも田辺自身「哲学ならぬ哲学」と言うこの「哲学」が親鸞の「宗教」とどのように関係する／しないのか、つまり「宗教哲学」の一言では済まない「としての」の複雑さを杉村靖彦氏が解きほぐす一方、ジョン・C・マラルド氏はアウシュヴィッツ生存者の赦しに関する経験ないし証言を手がかりに、懺悔道の鍵となる「絶対他力」を「いわば他力そのものの側から考察する」挑戦的な読解を通じて、懺悔・責任・赦し・他者性の相互関係という緊張を孕んだ問題に取り組んでいる（「一億総懺悔」から臭う「免責」の問題でもある）。

また、こうした焦点的な題材の共通性とは別に、論者の間にモチーフの呼応を聞き取ることもできる。二つだけ取りあげよう。一つは身体である。座談会や藤田論文では、一時期は人間主体の根源的否定性ないし偶然性を担うものとして主題化されていた「身体」が、種の論理の形成に伴って希薄化していく次第が指摘されており、嶺秀樹氏の論文は実際に当該時期の思想たる「絶対弁証法」—田辺の哲学者として自立を印すとも言える一の成立に身体性が果たした重要な役割を論じている。いわば半ばまでしか展開されなかったこの身体論の意義を、宮野真生子氏の論考はさらに遠くまで追求している。宮野氏は、九鬼周造の偶然論に対する田辺の批判の眼目を明確にする中で、身体が過去の「負荷性」を人間に突きつけると共に、負荷性を受け取り直して未来志向的に行為へと踏み出す「転換」の場でもあり、ひいてはその転換の

「力源」をめぐって、「主体」の存在論的な位置づけにも繋がることを明らかにしている（根源的偶然性に否定性・負荷性の主体化（行為的自覚）の契機を見る田辺と、主体不在の現実そのものの動性を見る九鬼、という対比は双方の魅力を見事に引き出しているものと思われる）。

もう一つは、ある種の関節の外れた時間のモチーフである。田口茂氏は、田辺が懺悔の時間性として語る「時の逆流」、すなわち懺悔が未来の救済への転機になるのではなくむしろその逆であるという信仰行為の「アナクロニズム」を、レヴィナスとデリダへの参照を介して照明している。予期・充足の目的論的構造に対応する通常の時間秩序の中断・攪乱であるがゆえに、他者としての他者との計算可能性を超えた遭遇の好機となる—したがって同時に最悪のものにさえ開かれていなければならない—この時間の経験としての「希望」が、田辺にあっては、「永遠」ないし「愛としての神」がそれ自身を「滅裂」することが「動く今」の成立の根源にあるという、時間の湧出そのものの核心に見出される。このような時間の断層は、田辺晩年の「死の哲学」における「死者」の位置づけを検討する竹花洋佑氏の論にも呼応する。氏は、生者における死者の「復活」について田辺が一息で語った文章に目を凝らし、そこに複数回出現する「自己」の語の用法が、復活する死者=自己と、復活を行いによって証する生者=自己に分裂していることを発見した上で（驚くべき精読!）、この二重性が「死復活」において本質的である所以を論じている。そこで死復活は、我々が「自己の死の向こう側からこの生のあり方を映し出す」、あるいは「生者と不断に格闘することの只中において、生前には知ることのなかった死せる他者に「生ける」死者」として不意に対面する」出来事であるからには、その時間は死の前／後が斜めにずれ込み合うような関節の外れた「現在」である。加えて、晩年のマラルメ論に「作品が何を象徴しているかではなく、どう象徴しているか」という鋭い問題設定で切り込む立花史氏の論考にも評者はこのモチーフを聞きとる。氏は実際に『蹊の一振り』の紙面を掲載して詩の展開を追っていく形で、田辺が着目したタイポグラフィーに焦点を当て、他者の詩に自らの象徴論を象徴させる田辺の遂行的な「象徴」をいわばコメントリー付きで再演してみせる。そして詩の最終頁の解釈ではまさに、荒海の質料的な動性と静止せる星座の永遠との「媒介転換」、あるいは「終末即始元」をいかにして「象徴」するかが賭けられているのである。なお、座談会では後期田辺が戦後フランス思想に通ずる要素を多くもつことが指摘されているが、これらの論考はそれを陰に陽に示すものと言えよう。

翻刻の苦勞が偲ばれる③の二つの「資料」はいずれも興味深い。特に『私観 教行信証の哲学』は、寥欽彬氏の解題でも示唆されるように、実際には展開されなかった田辺流「固有名の哲学」の片鱗のようなものが見られ、背景への関心や想像が膨らむ。

以上の如く、田辺を“今”読む知的冒険へと読者を誘惑する本書だが、④の目録のおかげで、とりわけこれから田辺に取り組む者にとって文献へのアクセスがぐっと容易になるだろう。舶来の大物と違って「田辺研究」の存在自体が未だ自明ではないなか、このような研究の土台整備への努力に本書の志の遠大さが感じられた。

INOHARA Jirō 猪ノ原次郎
Hokkaidō University